

## あわれな三つ塚物語（山南町）

六百年程の昔、吉野朝時代のことです。戦（いくさ）のために、都（みやこ）は一面の焼野原（やけのはら）となってしまいました。京都の御所に仕えていた兵部少輔（ひょうぶしょうすけ）という人がいました。少輔は、りっぱな家、屋敷（やしき）、財宝（ざいほう）は、みな焼かれ、家にいた従者たちもなくなり、広い都に身をおくところもなくなりました。

少輔は、妻と九才になる男の子と、七才の女の子をつれて、住みなれた都をあとにしました。少輔は男の子の手を、妻は女の子の手を引いて、かなしくも丹波路（たんばじ）へおちのびて行きました。

だれをたよるともなく、どこへおちつくともなく、四～五町（七十～八十メートル）行っは野原や木の下でやすみ、ただ夢地（ゆめじ）を行く心地でした。十日ばかりして、丹波の井原の前を流れる思出川（おもいでがわ）のほとりにたどりつきました。

この時少輔は、妻や子供のいたましい姿を見かねて、自分のつかれもかまわず川向うの民家へ物もらいに行きました。

とある立派（りっぱ）な家の前にきた少輔は、「何かたべものを、めぐんで下さらぬか。」と、声低くたのみました。

このような見た役人（やくにん）たち十余人が、口々に「夜うち、ごうとうの手先（てさき）かもしれぬ、捕（とら）えてしらべあげろ。」と、手をとり足をとって、きびしくしらべました。身にすこしもおぼえのない少輔は、「知りませぬ。存（ぞん）じませぬ。」と、こたえるばかりでした。

夫（おと）が物もらいに行ってから、かえりがあまりおそいので、妻が静（しず）かに立ちあがって、向うの里を見ようとした時、ふと堤（つづみ）の上から、声をかける男（おとこ）がありました。「お前（まへ）さん方は、京（きょう）の人ですか。いま、川（か）むごうの土屋敷（つむらいやしき）で、京（きょう）の人とおもわれるお方で、年のころなら四十才（よじゅうさい）ばかりの方が、ごうとうの手先（てさき）とまちがえられ、きびしくしらべあげられていた。もう死（し）んだかもしれぬえ。」

という、おもわぬ言葉（ことば）におどろいた母子（ぼし）三人は、だき合（あ）って、草（くさ）深い堤（つづみ）に泣（な）きずれました。

行くえ知らずの旅（たび）ではありますが、夫（おと）、父（ちち）をたよりに思い出（おもいで）の京（きょう）をあとにして、はるばるこの里（さと）までたどりついたものの、杖（つゑ）とも柱（はしら）ともする夫（おと）が、父（ちち）が、もはや死（し）んだとあっては、どうして生きながらえることができよう。「夫（おと）ひとり（ひと）を冥土（めいど）の旅（たび）にたたせては、申しわけがない。」と、最後の心（こころ）をきめた妻（つま）は、つかれきった二人（ふたり）のおさな子（こ）の手（て）を、しっかりとにぎって思出川（おもいでがわ）の淵（ふち）深く身（み）をなげました。

一方（ひと）うたがいが晴（は）れた少輔（せうぼう）は、菓子（かし）や果物（くだもの）などをたくさんもらって、いそいで川（か）のほとりまできてみると、妻（つま）や子（こ）がつけていた、かさ、ぞうり、杖（つゑ）などはあるが、その人影（ひとかげ）が見（み）あたらぬので、どうしたことかと、あわててさがすうち、渡（わた）し場（ば）を少し下（くだ）った「井（い）せき」に、人影（ひとかげ）らしいものが、ただよっているのを近づ（か）いて見（み）ますと、あわれや、妻（つま）と二人（ふたり）の子（こ）の最後（さいご）のすがたでした。

ああ!!、せつかく苦（くる）しみ（しみ）にたえて、はるばるたどりつたこの地（ち）で、妻（つま）と二人（ふたり）の子（こ）をうしなした少輔（せうぼう）の胸（むね）は、はりさけるばかりでした。思い出（おもいで）すのは、はなやかだった京（きょう）都（と）の生活（せいか）（くらし）、やさしい妻（つま）のこと、あどけない笑顔（えんご）の二人（ふたり）のおさな子（こ）のことなどです。

やがて、おそ月（つき）が、井原（い）の至山（いたりやま）の影（かげ）をおとすころ、兵部少輔（ひょうぶしょうすけ）は、かなしみのあまり、自分（みづか）も妻（つま）と二人（ふたり）の子（こ）をかかえて、川（か）の淵（ふち）へとびこみ共に空（むな）しくなりました。

里（さと）の人（ひと）々は、このあわれな姿（すがた）をみて、至山（いたりやま）のふもとにお墓（はか）をつくり、三つ塚（みつづか）といって、ねんごろにまつりました。このあわれな物語（ものがたり）は、太平記（たいへいぎ）三十三巻（さんじゅうさんまき）に「殿上（てんじょう）の貴人（きじん）身（み）を投（な）ぐ」と、題（だい）してくわしく書（か）かれています。

今は、この三つ塚（みつづか）の上に老松（らうしょう）や、桜（さくら）が生（な）えており、このあわれな物語（ものがたり）を聞（き）いて涙（なみだ）を流（なが）さぬ人（ひと）はありません。